

アイヌモシリよ／＼甦れ

右は自民党のファシストから

左は腐れ左翼の中国派まで

北方領土返還の

大合唱をやっている

北方領土だと

ふざけるな

日本固有の領土だと

冗談じゃないぞ

民族的悲願だと

とほけるな

日本国民の中には反対するものがない

国民的課題だと

お笑いだ

歴史の偽造はよしてくれ

手前勝手なこじつけは

やめてくれ

「千島」「北海道」の全域は

アイヌ固有の生活圏

アイヌモシリだ

これが歴史的事実であり

これが歴史的眞実だ

右から左までの

強欲なシャモどもよ

恥を知れ

そして深く悔い改めよ

オノレらの恥ずべき侵略の事実をこそ

まず眼をそむけずに凝視せよ

一三世紀頃から

封建制帝国日本の

シャモ武士団による

アイヌモシリ侵略が開始された

シャモどもは

渡島半島に拠点を築き

アイヌモシリの東部へ中部へ北部へと

侵略・征服を進めた

シャモどもは

アイヌの生活圏を破壊し

カムイの贈物を強奪し

共同体をズタズタに引き裂いた

シャモどもは

アイヌモシリを占領し

知行地なるものに分割し

場所請負なる奴隷制によって

アイヌを奴隷として酷使し

多くのメノコを強姦し

多くのウタリを殺した

アイヌはしかし

殺られてばかりいたのではない

アイヌの反日独立武装蜂起こそ

シャモどもが

まぎれもない冷酷非情な侵略者であり

「千島」「北海道」の全域が

アイヌ固有の生活圏であり

アイヌは日本人ではないことを

雄弁に物語っているのだ

一四五六年

シノリの反日独立武装蜂起を見よ

一四五七年

コシャマインらの反日独立武装蜂起を見よ

一六六九年

シャクシャインらの反日独立武装蜂起を見よ

一七八九年

クナシリ・メナシの反日独立武装蜂起を見よ
その狼煙は消えず

数百年を越えて

脈々と生きている

ワシらの魂の奥深くに生きている

シャモやヌチャ^①が侵入して来る以前の

原始のアイヌモシリは

なんとすばらしい世界だったろう

うっそうと生い茂った原始林

そこにはカムイが

熊や鹿や狐となって生活し

川にはサケやマスが

水色変ずるまでにさかのぼり

飢えることなく

貧富の差なく

お互いに助け合う

なんと素朴な生活

万物と語り合う

なんと詩的な生活

万物が育み合い

カムイに感謝し

カムイに祈る

なんと喜びに満ちた生活

このアイヌモシリを破壊したのはだれだ

まぎれもなくシャモどもだ

そしてヌチャどもだ

日本帝国とロシア帝国だ

シャモとヌチャの条約など

ワシらにはあずかり知らぬこと

ワシらは決して認めやせんぞ

シャモどもよ出ていけ

ヌチャどもよ出ていけ
アイヌモシリは滅びず
アイヌモシリは甦る
必ずやアイヌモシリは甦る
反日革命戦争のルツボのなかで
アイヌモシリは甦る
反露革命戦争のルツボのなかで
アイヌモシリは甦る
日本帝国よ 滅びよ
祝われて滅びよ
ロシア帝国よ 滅びよ
祝われて滅びよ
世界革命戦争の炎に焼かれ
苦悶の叫びをあげて滅びよ

註① アイヌ語でロシア人のこと

帰ってきたジャッカル

あいつはいっちまった
都市にいっちまったよ
あれはだいぶ前の話し
あいつは俺の義兄弟のようなもの
それほど俺はあいつにほれていたのさ
あいつは

“砂漠のジャッカル”

と呼ばれたゲリラ戦士
そのすばしこいことジャッカルのごとく
その執拗なことジャッカルのごとく
そのしなやかなことジャッカルのごとく
あいつは天性の狩人

あいつは天性のゲリラ戦士だった
狙ったエモノは絶対逃さず

とことん追いつめ

必ず撃ちとってみせたもの

銃を撃たせりゃ百発百中

あいつの右に出るものなし

ナイフさばきも天下一品

そのひとふりで

エモノの喉頸のどくびかっきた

何昼夜の追跡にも疲れを知らず

神出鬼没のゲリラ戦法で

植民地主義者をキリキリ舞いにふり回し

奴らに多大の出血強いたもの

あいつは底抜けの楽道家

それでいて緻密な戦略家

作戦前には仲間の緊張ほぐすため

気の利いた冗談さかんとばし

失敗あってみなが沈んでいる時には

大声をあげて歌うたい

しめった気分を追っ払った

都市で幹部教育を受けたことのある

あいつの口癖くちぐせはこうだった

都市はゲリラ戦士の墓場だ

都市はゲリラ戦士をダメにする

銃砲一つあつかえぬ

都市のダラ幹連中に革命などできやしない

口先だけで指導して

銃も握れぬいくじなし

都市のダラ幹連中は革命のお荷物だ

俺は都市には向いてねえ

俺には砂漠の戦場がお似合いだ

砂漠に生きて

砂漠に戦い

砂漠に死ぬ

これが俺の宿命だと

ところがあいつは都市の幹部に抜擢^{はつてき}されて

あいつの嫌いな都市へいっちゃまったのよ

それには深い深い訳がある

深い訳とはこういうことだ

女っ気のまったくなかったあいつに

女ができたことがそもそもそのまちがい

俺たちはあいつを指揮者として

いつものように敵をもとめて出撃した

住民から敵接近の情報が入ったためだ

だいぶ目が傾いていた頃だった

住民の情報は正確だった

俺たちは敵と遭遇し

たちまちのうちに殲滅しちまった

だが日は沈み

基地への帰還は無理だった

そこで俺たちは近くの部落にいった

夜営することにした

ことの発端はその部落で起こったのだ

俺たちがその部落に近づくと

部族民総出で歓迎だ

憎っき植民地主義者を

成敗したという情報は

もうとっくに伝わっていたのだ

部族民たちの大げさな歓迎を

できるだけ丁重にことわって

食料と水を金を払って買い求め

近くにテントを張って休むため

あいつは部族長のところへ交渉にいった

そしてそこに一人の娘がいた

年の頃はじゅうしちはち
見るからに愛らしく魅力的な
部族長の目に入れても痛くない
自慢の一人娘だった
どっちから先にひとめぼれしたのか
そいつあー俺にはわからねー
たぶんあいつと部族長がやりとりのあいだ
娘はその熱いまなざしをあいつに
じっと注いでいたにちがいない
あいつもチラッチラッと娘の方に
視線を投げかけていたにちがいない
そして交渉がまとまって
あいつが部族長のテントから出たあとを
その娘が追ってきて
あいつと娘はなにやら
言葉をかわしたにちがいない

地平線上に太陽があがりはじめたころ
俺たちは起床して
簡単な朝食をほうばって
出発の準備をはじめた
そこへ部落の女たちが総出で
食事をもってやってきた
むろんあの娘もそのなかにいた
俺たちはことわりきれずに
別れの食事をほうばった
例の娘はあいつのそばにびったり寄りそい
娘とあいつは楽しげに語らっていた
さあ出発だ
なごりおしげに
いつまでもあいつの後姿を追い求める
いじらしい娘を残して
俺たちは基地への道をいそいだ

それから一週間というもの
毎日のごとく出撃・戦闘が続いた
あいつはいつもよりはりきって
戦果はいつもより上がった
あたかも娘のことなど
全く忘れてしまったかのように
頭のなかには
一人でも多く敵を殺すことしかない
といわんばかりに
あいつは血なまぐさい戦闘の日々を
はつらつと生きていた
だが一週間たったある日
日がくれて
俺たちが基地に帰ってみると
なんとあの娘がいたのだ
親父ドンの目を盗み

白昼一人でラクダにのって
あいつにあいに行ってきたのだ
それを知った時の
あいつの表情たらなかったぜ
喜こんでいるのやら
迷惑がっているのやら
あいつと娘はひと晩じゅう語り明かした
何を話したか俺は知らない
だが話し手はあいつで
娘は終始一貫聞き手だったにちがいない
植民地主義者どもを
打倒せにゃならんこと
独立革命戦争の大義のこと
今まで戦ってきた輝かしい戦闘と
その勝利のこと
自分は一生ゲリラとして戦い

ゲリラとして死ぬこと

だから娘とは結婚できないこと
などを

あいつはあるいは熱っぽく語り

あるいは父が娘をさとすように

言い聞かせたにちがいない

だが娘はあいつの話しを聞けば聞くほど

輝く瞳を熱くして

熱い思いをつのらせて

娘は言ったにちがいない

私もゲリラ戦士になって

あなたといっしょに戦いたい

そしていっしょに死にたいと

それに対してあいつがなんと言ったかは

想像にまかせよう

次の朝

娘の親父ドンが

武装した若いもんをひきつれて

基地へと向かってやってくるという

情報が入った

昼頃親父ドンたちはやってきた

なぜやってきたかって

それは言うまでもなからう

一人娘を奪い返しにきたのだ

部族長の親父ドンは

あいつが娘を奪ったと思ったのだ

たとえ砂漠のジャッカルと呼ばれて

恐れられた男であろうと

いつ死ぬかしないゲリラ戦士なんぞに

かわいい一人娘をやるもんか

というわけだ

親父ドンはあいつに激しく抗議して

娘を力づくでひきつれていった

娘を守ろうとしないあいつに対して

娘は涙ながらにこう言った

私がほしくないの

あなたはいくじなしなのねって

そのときのあいつのジレンマと苦しみようを

いったいだれが理解し得ただろう

住民の支持あつてのゲリラなのだ

あいつ一人の利益のために

住民を敵に回す訳にはいかんのだ

だが娘への思いを

たち切ることもできはしない

いくじなしだと

愛しい娘からなじられて

なにもできないあいつの苦衷を

いったいだれが察しよう

その日のあいつの沈みようだったらなかったぜ

俺たちはあいつをなくさめ

気を盛り立ててやろうと試みたけれども

ダメだった

その精悍な相貌

ひきしまつてガッシリとした体軀

きびしさのなかにも人をひきつけるやさしさ

あの娘がおまえにほれるのは当然よ

男の俺だっておまえにほれているんだから

だがおまえともあろうものが

あんな乳くさい小娘にほれるなんて

わからんかと

おだてたりけなしたりしてみたが

ダメだった

娘っ子一人にふり回されるなんて

とうとう砂漠のジャッカルさまも

ヤキが回ってしまったのかと
聞こえよがしに

冗談の一つも飛ばして見たが
ダメだった

その日以降の

俺たちの対戦成績はガクンと落ちた
砂漠のジャッカルは

死んだように生気を失っていった

今にも死にそうになっていた

ところがちょうどその頃

都市からあいつに召還命令がとどいた

いつものあいつだったなら

全く無視してかえりみなかっただろうに

しかし今度ばかりは

なにか決心したようだった

伶俐な戦略家であるあいつの腹んなかに

グッドアイディアが浮かんだにちがいない

あいつは早々都市へ退却する準備をはじめた

俺を後釜の臨時指揮者に指名して

ある作戦を練りはじめた

その作戦というのは

あの娘を奪って

都市へ行くという作戦だった

ゲリラ部隊の指揮者という公的地位を

解除されたあいつにして

はじめて浮んだ作戦だった

あの日娘をつれかえた

部族長の親父ドンは

あいつに娘をとりもどされないうために

若いもんを武装させ

娘を檻かりにとじこめて

警戒させているという

話だった

あいつは都市への出発のその前夜

近くに敵から奪ったジープを待機させ

身に寸鉄をおびずに丸腰で

夜陰に乗じて娘のいる部落に潜入し

みごと娘を救出し

めでたく都市へと逃げこんだ

それからあいつと娘がどうなったか

俺んところにや

うわさ一つとどかない

砂漠のジャッカルのとをおそって

ジャッカル部隊の指揮者に指名され

部隊全員の賛成を得たものの

俺たち部隊の対戦成績は

あいつにはおよびもつかなんだ

それなのに

植民地主義者どもの大攻勢が

近いうちにあるという情報が

今頻繁にとき出しているのだ

いったい都市のタラ幹どもは

なにを考えているのだ

砂漠のジャッカルはどこへ行っちまったんだ

おいおいやけに外が騒がしいじゃないか

なにか事でも起こったのか

なんだって

砂漠のジャッカルがかえってきたって

あいつがかえってきたって

それはほんまかいな

まちがいじゃなからうな

それも銃をもった牝ジャッカルと

なかよく肩をならべて

めんこい子ジャッカルを抱きかかえてだって

あいつはきつとこう言うぜ

都市はゲリラ戦士の墓場だ

都市はゲリラ戦士をダメにする

鉄砲一つあつかえぬ

都市のダラ幹連中に革命などできやしない

口先だけで指導して

銃も握れぬいくじなし

都市のダラ幹連中は革命のお荷物だ

俺は都市には向いてねえ

俺には砂漠の戦場がお似合いだ

砂漠に生きて

砂漠に戦い

砂漠に死ぬ

これが俺の宿命だって